

Fig.289 第29号住居跡出土遺物

る。口縁部は大きく外反する。外面口縁部は横ナデ、胴部は継位のヘラケズリ。内面口縁部横ナデ、胴部ナデで仕上げている。焼成は良好で、橙色を呈する。5は塊形を呈する手捏土器。完存する。器高4.2cm、口径6.8cmを測る。底面は丸底を呈し、体部はほぼ垂直に立ち上がる。口唇部は波状をなす。底部は肥厚し、口縁部にかけて漸次器厚が薄手となる。粘土塊を抉り出して成形されたもので、内外面とも指頭圧痕が残る。焼成は良好で、にぶい褐色を呈する。

## 3. 第V期の住居跡

## 第17号住居跡 (SI17) (Fig. 290~294)

**位置** 本跡は、調査区南東部で 13-M、13-N 区の標高22.22m~22.36mに位置する。北東側は第18号住居跡 (SI18) が、南東側は第19号住居跡 (SI19) が隣接する。

**形態** 平面形は、方形を呈する。長軸3.30m、短軸2.88mを測り、長軸方位は N-17°-E を指し、小型の住居跡である。壁は全体的に深く東辺、西辺、南辺、北辺ともほぼ垂直に立ち上がる。床面は水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

**覆土** 6層に分層可能である。自然埋没土層である。

1層	10YR2/2	黒褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。
2層	10YR2/3	黒褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。
3層	10YR3/4	暗褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。
4層	10YR3/3	暗褐色土	少量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。
5層	10YR5/8	黄褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。
6層	10YR5/6	黄褐色土	多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。

**住居施設** 住居内部の施設として柱穴 2 本およびカマド 1 基が確認された。

柱穴は P1 と P2 で、P1 は南壁中央に位置し、上面が 32×34cm の楕円形、深さ 25cm。P2 は P1 の北側に接して構築されており、上面で 36×44cm の楕円形で、深さ 25cm を測る。P1 は入口部施設に伴う柱穴であり、P2 も同様の施設のひとつかも知れない。

カマドは北壁の東端に設置されている。いわゆる「コーナーカマド」と呼称されている形状とは異なり、通常みられる壁カマドの形式を踏襲する。天井部は既に崩落しているものの、遺存状態は良好である。壁より 36cm 奥に煙道部として掘り込まれ、やや緩やかに傾斜して立ち上がる。また袖部取り付け部の間口は 75cm と広く、現存する袖部の幅は右袖部で 25cm、左袖部で 27cm を測る。袖部の部材は砂質白色粘土を使用し、燃焼部を囲むように構築されている。燃焼部は床面から僅か 2cm の掘り込みであるが、火熱による赤化が顕著に認められる。

周溝はカマド構築部を除きほぼ全周する。幅 16~26cm、深さ 10~12cm で、底面はほぼ平坦で起伏の部分はみられない。

**掘り方** 掘り方は、床下全面に及び、緩やかな起伏をもち、全面に広がっているが、柱穴部分のみが大きく掘り盛みられている。

**遺物出土状況** 遺物は、住居全体に散在するものの、とくに南壁付近にややまとまって出土している。図示しうる資料は、鉢 1 点、壺 1 点、須恵器破片 2 点である。

**遺物** 1 は鉢。体部約 1/4 程度を遺存する。器高 7.5cm、推定口径 18.4cm を測る。体部はやや内湾気味に立ち上がる。外面口縁部は横ナデ、体部は縦位のヘラ削り。内面はヘラナデ整形。焼成は良好で、鈍い褐色を呈する。2 は完存する壺である。器高 4.3cm、口径 12.6cm を測る。やや丸味をもつ底部から内湾気味に体部が開く。外面口縁部は横ナデ整形。体部もナデ整形で、輪積痕が残る。底部付近横位のヘラナデ。内面はヘラナデ整形を施す。焼成は良好で、橙色を呈する。3・4 は須恵器の臺で胴部の大型破片である。胴部は球形を呈し、外面は 3 が斜位のタタキ目、4 が縦位のタタキ目が施されている。

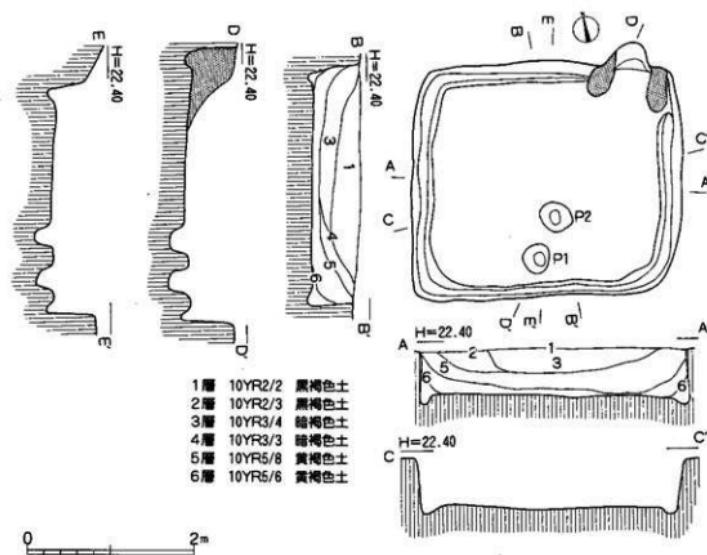


Fig.290 第17号住居跡

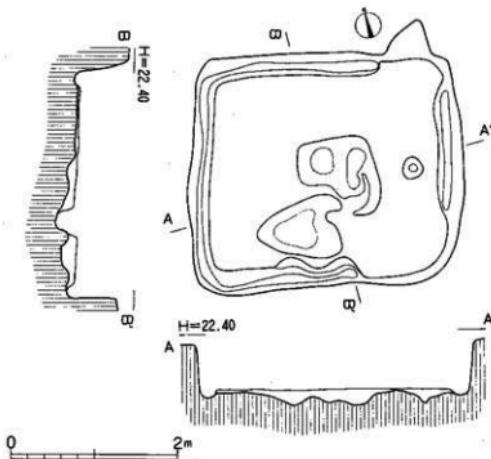


Fig.291 第17号住居跡掘り方

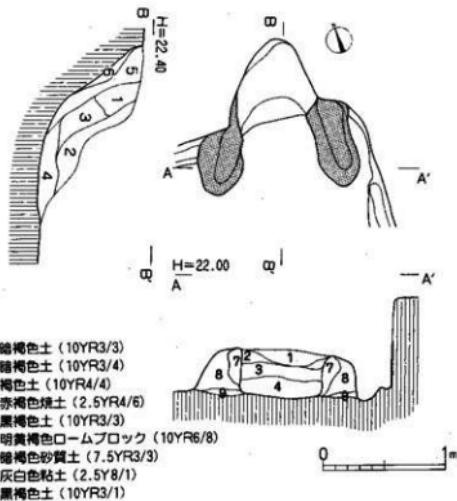


Fig. 292 第17号住居跡カマド

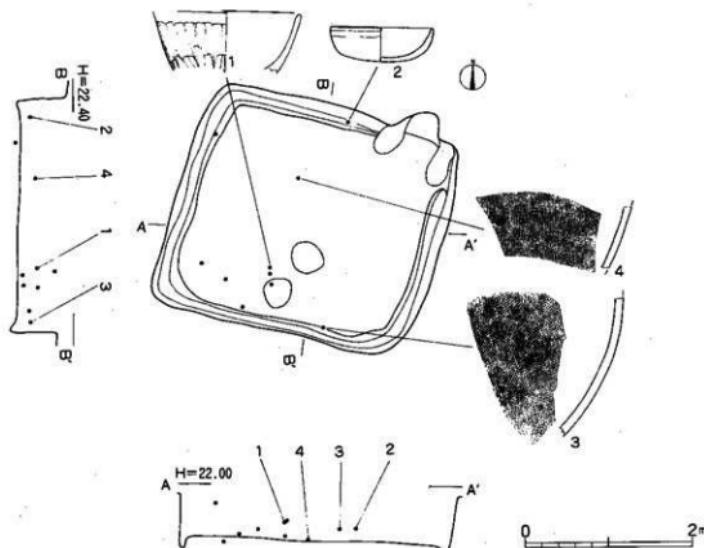


Fig. 293 第17号住居跡遺物分布図

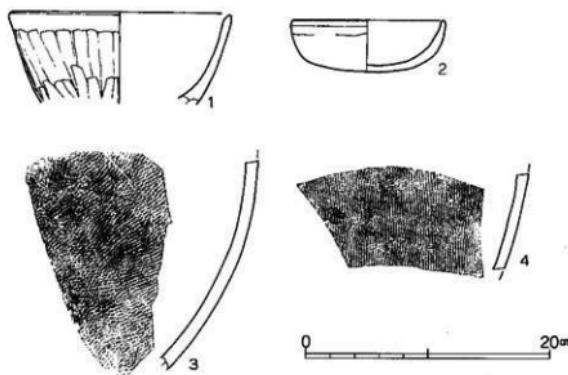


Fig.294 第17号住居跡出土遺物

## 第25号住居跡（SI25）（Fig. 295～297）

**位置** 本跡は、調査区東端部、10-P区の標高22.38m～22.42mに位置する。南側に第24号住居跡（SI24）が、西側に第27号住居跡（SI27）が隣接する。

**形態** 本跡は東側約半分が保存区域に入っているため、調査は西側半分のみである。平面形は、方形を呈する。長軸2.32m、確認された短軸は1.56mを測り、長軸方位はN-8°-Eを指し、小型の住居跡である。検出した壁は南辺、西辺、北辺がほぼ垂直に立ち上がる。床面は水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

**覆土** 3層に分層可能である。自然埋没土層である。

1層 7.5YR3/1 暗褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。

2層 7.5YR2/3 極暗褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。

3層 7.5YR4/4 褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。

**住居施設** 住居内部の施設として、ビット1本が確認された。

P1は西壁際ほぼ中央に位置し、上面が36×50cmの楕円形、深さ26cmを測る。形状から判断して柱穴ではなく、性格不明のビットである。

なお、床上全体から炭化物と焼土塊が広がっていた。焼失家屋である。

**掘り方** 掘り方は、床下全面に及び、緩やかな起伏をもち、全面に広がっている。

**遺物出土状況** 遺物は、東壁際床面上より壺の完形土器1点が出土している。

**遺物** 1の壺のみ出土。体部は底部から直線的に立ち上がり、口縁部は比較的小さく開く、ロクロ成形。体部下端はヘラ削り整形。底部は回転糸切り後、全面ヘラ調整を施す。

（小川 和博）

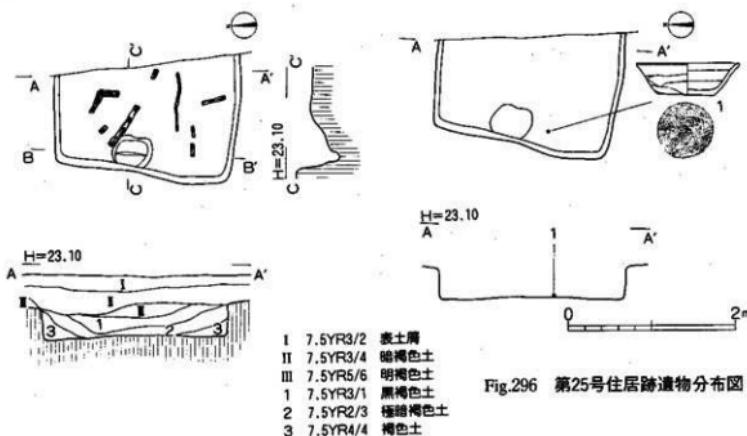
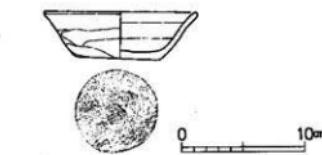


Fig.296 第25号住居跡遺物分布図



## 第VII章 成果と今後の課題

### 第1節 調査の成果と今後の課題

#### 1. はじめに

川崎山遺跡は印旛沼水系にかかる新川左岸の台地上に位置する。ここは比較的広い低地を背景に、水田耕地確保の有利な場所であり、周辺には権現後遺跡や北海道遺跡、井戸向遺跡などいわゆる「葦田遺跡群」と呼ばれるエリアの中で大規模集落がいくつも形成されている所である。今回の発掘調査では、旧石器時代のユニットから奈良時代の住居跡まで検出され、村落形成が長期にわたり継続していたことが明らかになった。これは先の葦田遺跡群の一角に本遺跡も含めて考えなければならないことを意味している。いうまでもなく、こうした遺跡群の形成は一挙になされたわけではなく、弥生時代後期から始まり、弥生時代終末に発展し、さらに古墳時代中期に盛行する拠点的規模の集落から、一転して古墳時代後期以降、縮小あるいは欠落する周辺の集落に変化してしまうことが判明した。こうした大局的にみた村落変遷過程の中で、明らかに有機的な関係で結ばれていると想定される周辺遺跡群を無視することはできない。つまり、ここ葦田という広い領域の中で土器をはじめ住居群も共時態として共存し合う動態は、まず権現後遺跡が形成され、やがて川崎山遺跡とラサル山遺跡が出現し、最終的には白幡前遺跡でみるような平安時代の拠点的集落や対岸に占地する「村神郷」が存立するまで、單一遺跡では維持できない相互補完的な単位遺跡群としてのまとまりを看取することができる。

#### 2. 川崎山遺跡の住居跡形態

本遺跡における弥生時代後期から古墳時代後期・奈良時代にかけて51棟の竪穴住居跡が検出され、それらの集落変遷については、既に第V章弥生・古墳時代の調査の中で触れたとおりである。ここ「川崎山集落」では弥生時代から奈良時代までを出土土器の諸変化にもとづいてⅠ期からⅤ期までの時期区分を試みている。そこでまとめとして検出された住居跡の概観をⅠ期からⅢ期まで略述することにしたい。

#### 1期

川崎山遺跡の集落出現段階であり、13棟がそれに相当する。規模や形態にかなりバラエティーに富んでいるものの住居跡群は重複することなく調査区中央の保存区域を中心に大きく東側台地縁辺部と北西側縁辺部に沿って偏るように分布している。出土遺物は弥生時代後期のいわゆる「白井南様式」の土器を主体にするものであるが、SI15でみると「弥生町様式」の土器が伴うものも存在する。

そこでまず住居跡の概要について示しておきたい。

まず住居跡の規模について分類しておきたい。該期では正方形や正円形といったものではなく、すべてどちらかの一辺が長い長短軸をもつものだけで、長軸で長いものは7mを越える住居から2m台の小形のものまで存在する。13棟すべてが完掘されたわけではないが、床面積の平均値をみると約25m<sup>2</sup>前後を測り、これを基準にして小型から大型住居を分けてみると、15m<sup>2</sup>未満の小型住居（SI30・45・47）、15～30m<sup>2</sup>未満の中型住居（SI15・23・35・43）、30m<sup>2</sup>以上の大形住居（SI27・36・37・38・39・42）と明確に区分することができる。こうした規模の違いは住居跡の形態にも関係しており、基本的には橢円形を基調とするものの、SI23、SI43、SI45の円形状やSI15、SI30、SI47の隅丸方形状といった、小型において方形や円形に近い形態をみることができる。これを長短軸の割合をしめすために、長短軸指数（長軸

住居番号	平面形	規模 (m)	方位	主柱穴	炉	入口部	貯蔵穴	柱穴配置
SI15	梢円形	(4.40) × 4.46	N-38°-W	4	地床炉	不明	無	a類
SI23	略円形	4.12 × 3.98	N-20°-E	2	地床炉	無	無	
SI27	梢円形	6.52 × 5.60	N-80°-E	4	地床炉	有	無	b類
SI30	梢円形	3.70 × 3.44	N-28°-W	6	地床炉	有	無	b類
SI35	梢円形	5.74 × 4.26	N-48°-W	4	地床炉	有・梯子穴	無	a類
SI36	梢円形	7.62 × (2.38)	N-53°-W	2	地床炉	不明	無	a類
SI37	梢円形	7.06 × 5.18	N-31°-W	4	不明	有・梯子穴	無	a類
SI38	梢円形	6.58 × 5.48	N-40°-W	4	地床炉	梯子穴	無	b類
SI39	梢円形	6.36 × 4.90	N-48°-W	4	地床炉	梯子穴	無	b類
SI42	梢円形	7.58 × (5.50)	N-57°-W	4	地床炉	有・梯子穴	無	a類
SI43	略円形	4.94 × 4.40	N-65°-W	4	地床炉	有	無	b類
SI45	円形	3.72 × 3.60	N-5°-E	4	地床炉	無	無	a類
SI47	隅丸方形	2.86 × 2.64	N-20°-E	3	地床炉	梯子穴	無	

／短軸×100)をグラフにしてみてみると、長短軸の比率が高いほど、長短差の幅がなく、逆に比率が低いほど長短差幅が広いことを表しており、長短軸の比率をほぼ等しく保ったまま、大小の関係をもつていていることになる。したがって、この比率は多少の大小関係があったとしても、その集団がもつ同じ設計のもとに構築されたことを示唆している。いま小型が指数90以上、中型が指数85前後、大型が80前後となり、大型になるほど長短軸の比率が高くなることを示している。

このように平面形に長短軸の幅があるとはいえ、入口部がすべて短軸側にあるとは限らないが、ここでは確認された9棟すべて短軸辺中央部に方形に掘り窓めた入口部施設もしくは梯子穴と思われる柱穴が設置されており、いわゆる縦型住居を呈している。また住居内施設である炉跡の形態は地面を掘り窓めた単純な地床炉で大型住居も小型住居も規模や形状に大きな変化はみられないが、大型住居における炉跡と柱穴の位置関係および柱穴の配置関係にa類とb類の2態あることが認められた。すなわち

a類；柱穴の位置が住居跡の平面形に沿うように、長軸辺に幅広く、短軸辺に幅狭く配置させる。

したがって炉跡は柱穴間に位置する。(SI35・36・37・42)

b類；柱穴の位置が住居跡の平面形とは逆に、長軸辺側が幅狭く、短軸辺側が幅広く配置させる。

したがって炉跡は柱穴間の外側もしくは柱穴間に位置する。(SI27・38・39・43)

これら2者の相違が時期差であるのか、あるいは外部からの影響によるものか、主体となるものはどちらなのか今は判断できない。同じ集落内で、こうした平面形はほとんど変わらないのに柱穴配置の違いは、明らかに屋根構造の変化をも意味している。これら相互が特別な住居として意識して構築したわけではなく、一般住居として存立している背景をもう一度考え直す必要がある。この二型の柱穴配置は次のⅡ期においても継承される。

## Ⅱ期

弥生時代後半「弥生町様式」にかかる時期である。I期につづく発展期として位置付けられ、10棟がそれに相当する。規模や形態についてはI期に比較し、規模はともかくとしてかなり均一的である。やはり住居跡群は重複することなくSI40を除き、調査区の南側半分に集中している。これは当該期の住居跡群がさらに南方向に広がることを示唆している。出土遺物は弥生時代後期のいわゆる「弥生町様式」で出土する土器は、壺と口唇部に刻目をもつ台付壺に代表される。

そこで住居跡の概要について示したい。

住居番号	平面形	規模(m)	方 位	主柱穴	炉	入口部	貯蔵穴	柱穴配置
SI04	隅丸方形	6.50×5.40	N-23°-W	4	地床炉2	有・梯子穴	無	a類
SI05	隅丸方形	4.24×4.08	N-84°-E	4	地床炉	有・梯子穴	無	b類
SI06	隅丸方形	7.00×6.25	N-45°-W	4	地床炉	梯子穴	無	a類
SI08	隅丸方形	5.64×5.44	N-40°-W	4	地床炉	無	無	a類
SI11	隅丸方形	4.12×3.90	N-44°-W	4	地床炉	梯子穴	無	b類
SI22	円 形	7.14×6.86	N-8°-E	4	地床炉	梯子穴	無	b類
SI32	隅丸方形	6.72×6.08	N-31°-W	4	地床炉	梯子穴	有	a類
SI40	隅丸台形	4.04×3.34	N-29°-W	0	無	無	無	
SI48	隅丸長方形	5.82×4.94	N-44°-W	2	地床炉	無	有	a類
SI51	隅丸方形	4.82×4.80	N-45°-E	4	地床炉	無	有	

まず住居跡の規模について分類しておきたい。該期での基本形はSI22の円形を除き方形を基調とするものの、やはり正方形とするものはなく、いずれか一辺が長い長短軸をもつもので、長軸で長いものは7m、短いもので4m台の中型住居跡が主体である。ここで床面積の平均値をみるとI期住居跡よりもやや大きくて約29m<sup>2</sup>前後を測る。またI期で基準にした数値から小型・中型・大型住居に分けてみると、15m<sup>2</sup>未満の小型住居(SI40)は1棟のみで、15~30m<sup>2</sup>未満の中型住居(SI05・11・48・51)と、30m<sup>2</sup>以上の大型住居(SI04・06・08・22・32)に大きく二区分することができる。基本的には長方形を基調とするものの、SI51のように長短軸がほぼ差がない正方形に近いものもある。ここでも長短軸の割合を示すために、長短軸指数(長軸/短軸×100)をグラフにしてみてみた。長短軸の比率が高いほどより正方形に近づき、長短差の幅がなく、逆に比率が低いほど長短差幅が広く、長方形をとる。ここでは指數90以上が中型・大型住居7棟あり、また指數83前後が小・中・大型住居それぞれ1棟づつある。これは平面形に長短軸の幅差がそれほどでないことを意味している。また、入口部施設の構築されているものが2棟確認されている。いずれも三日月状に土盛りさせたもので、梯子穴も穿ってある。

### Ⅲ期

古墳時代4世紀末から5世紀に相当する時期である。本遺跡で最も盛行期する段階で、24棟の住居跡が検出されている。規模や形態については長方形から方形への変遷が考えられるが、明確な画期は不可能である。ここでは高壇と埴形土器が特徴的である。

そこでまず住居跡の概要について示しておきたい。

住居番号	平面形	規模(m)	方 位	主柱穴	炉	入口部	貯蔵穴	柱穴配置
SI01A	長方形	5.84×5.30	N-43°-W	(3)	地床炉2	無	有	a類
SI01B	長方形	4.22×4.14	N-28°-E	4	地床炉	無	有	b類
SI02	方 形	3.60×3.36	N-46°-W	0	無	無	無	
SI03	楕円形	3.40×2.68	N-43°-W	0	無	無	無	
SI07	方 形	3.00×2.96	N-44°-W	2	地床炉	無	無	
SI09	方 形	5.34×3.60	N-62°-W	2	地床炉	無	無	b類
SI10A	方 形	4.34×4.00	N-68°-W	4	地床炉	無	無	a類
SI10B	長方形	6.25×5.34	N-38°-E	4	地床炉	無	有	b類
SI12	方 形	5.72×5.16	N-42°-W	1	地床炉	無	有	

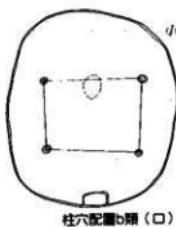
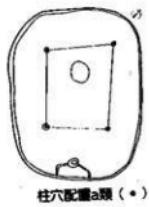
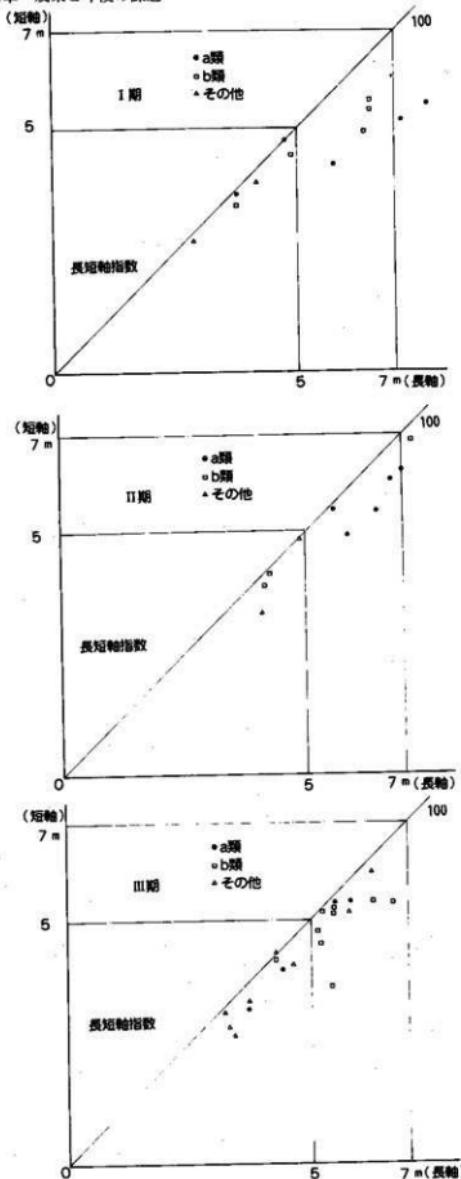


Fig.298 I～III期住居跡長短軸指數と柱穴配置

SI13	方 形	5.18×4.50	N-12°-E	4	地床炉	無	有	b 類
SI16	方 形	4.64×4.12	N-32°-W	1	地床炉	無	有	
SI18	方 形	3.60×3.26	N-73°-W	4	地床炉	無	無	a 類
SI19	方 形	5.24×5.18	N-48°-W	4	地床炉	無	有	b 類
SI20	方 形	5.48×5.22	N-73°-W	4	地床炉	無	有	b 類
SI21	方 形	4.22×4.20	N-13°-E	4	無	無	無	
SI24	方 形	6.70×(3.80)	N-11°-W	2	地床炉	無	無	
SI26	長方形	6.60×5.30	N-9°-E	3	地床炉	無	有	b 類
SI28	方 形	5.44×5.44	N-62°-E	4	地床炉	無	有	a 類
SI31	方 形	3.23×3.03	N-48°-E	0	地床炉	無	無	
SI33	方 形	5.08×4.60	N-83°-E	4	地床炉	無	有	b 類
SI34	方 形	5.40×5.20	N-0°-EW	4	地床炉 2	有・梯子穴	有	b 類
SI41	方 形	1.04×1.04	N-8°-W	0	不明	不明	不明	
SI44	長方形	3.30×2.66	N-48°-E	4	地床炉	無	有	b 類
SI46	方 形	6.26×6.00	N-55°-W	3	地床炉	無	無	
SI49	方 形	2.90×1.24	N-36°-W	0	不明	不明	不明	
SI50	方 形	3.78×1.10	N-25°-E	2	不明	無	有	

まず住居跡の規模について分類しておきたい。該期での基本形は6棟の長方形住居跡を除き方形を基調とするもので、極端に長短軸をもつものは少なく、長辺短辺ほぼ同値というのも確認されている。ここでの床面積の平均値をみるとI期住居跡よりもさらに小さく約22m<sup>2</sup>前後を測る。やはりI期で基準にした数値から小型・中型・大型住居を分けてみると、15m<sup>2</sup>未満の小型住居(SI02-03・18・31・41・44・49・50)が8棟あり、15~30m<sup>2</sup>未満の中型住居(SI1B-09・10A・12・13・16・19・20・21・28・33・34)が13棟で、30m<sup>2</sup>以上の大型住居(SI01A・10B・24・26・46)が5棟となる。基本的には方形を基調とするもので、長短軸指数が90をきるものが4棟、指数が90以上のものが14棟確認されている。

(小川 和博)

## 参考文献

- 天野 努他 1974「八千代市村上遺跡群」千葉県都市公社  
 平岡和夫他 1979「董田町川崎山遺跡発掘調査報告書」八千代市遺跡調査会  
 坂田正一他 1984「八千代市権現後遺跡-董田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」千葉県文化財センター  
 坂田正一他 1985「八千代市北海道遺跡-董田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」千葉県文化財センター  
 坂田正一他 1986「八千代市ツサル山遺跡-董田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」千葉県文化財センター  
 藤岡幸司他 1987「八千代市井戸向遺跡-董田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅳ」千葉県文化財センター  
 大野康男他 1991「八千代市白幡前遺跡-董田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅴ」千葉県文化財センター  
 大野康男他 1993「八千代市坊山遺跡-董田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅵ」千葉県文化財センター  
 大野康男他 1994「八千代市権現後遺跡・北海道遺跡・井戸向遺跡-董田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅶ」  
 千葉県文化財センター  
 八千代市教育委員会 1994「千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告」

## 第2節 八千代市川崎山遺跡を中心とした石製模造品の出現に関する一考察

### 1. はじめに

古墳時代における石製模造品の出現について述べる前に、古墳時代の中期の社会において、石製模造品の位置付けがどのようなものであるのかを先駆による多くの研究の成果を踏まえて触れておかなければならぬ。石製模造品という特殊な祭祀遺物を中央政権との関りの中で考えられたのは、1953年に伊藤信雄氏が「東北地方に於ける石製模造品の分布とその意義」(『歴史』第6輯)の中で述べられたのをはじめ、相山林雄氏も1965年に「古代祭祀遺跡の分布私考」(『上代文化』第35輯)で書かれている。特に相山氏は、関東においては石製模造品が使用されていた時期を和泉式土器の使われていた時期と、ほぼ一致するとし、東日本においては、長野県の神坂峠、入山峠などの時の祭祀遺跡や、いわゆる東山道や東海道などの主要な古代道沿いに祭祀遺跡が分布されている点を指摘されている。「特に長野県以東、仙台市以西に濃密に分布し、東国では東山道、東海道沿い、東北では浜通りと中通りに分かれる。」と記され、石製模造品の分布を古代中央政権の勢力の拡張の進路と位置づけられている。祭祀遺跡が、古代大和政権と密接に関連しているとの考え方には、亀井正道氏も、1967年に「祭祀遺跡－山と海－」(『日本の考古学』第7巻)で示され、海上航路の主要幹線に沖ノ島・大飛鳥・神島などの祭祀遺跡が存在していることを指摘され、「中央政府に密着した祭祀の存在」を推測されている。祭祀遺跡やそれに伴う石製模造品に対する考え方には、その後、「中央政権つまり古代ヤマト政権と少なくともなんらかの関連がある。」とされてきた。そして、佐々木幹雄氏は、1985年に「子持勾玉私考」(『古代探叢II』)の中で、石製模造品をヤマト政権による地方支配の象徴であるとし、石製模造品(特に劍形模造品、双孔円板、単孔円板、勾玉、白玉など)を、のちに三種の神器となる、劍・鏡・玉をそれぞれ摸したものとされ、このセットこそが、中央の地域支配の象徴と考えられているようである。確かに、石製模造品の劍形模造品は劍を、双孔円板・単孔円板(無孔円板は鏡を、白玉・勾玉などの玉類は玉を模した仮器であるという考えはほぼ、疑う余地はないと思う。されど、これらを劍・鏡・玉の3点で1つのセットと考えるという考え方には、いささか疑問がある。言うまでもなく、これらの石製模造品が検出される遺跡は祭祀遺跡(カミマツリの痕跡を示す祭祀遺構を伴う遺跡で、集落址内や墳墓等で検出される祭祀行為を行なった“場”や、“祭祀場”的みしか検出されない狭義の祭祀遺跡を含む。)あるいは、祭祀関係遺跡(祭祀遺構を伴わない遺跡で、祭祀関係遺物のみしか検出されない遺跡。集落址内の土坑や竪穴式住居、あるいは、土馬や子持勾玉などの遺構を伴わず単独で出土する遺跡もこれに含む。)であり、とくに最近の著しい発掘調査件数の増加によって、これらの祭祀遺跡や祭祀関係遺跡の調査例も増えてきている。これらの中で特に集落址内の祭祀関係遺跡の調査は、大規模な台地全体を調査するような、より広範囲な面的な調査例の増加に伴い、急増している。これは、今までの発掘調査が比較的狭い面積の調査が多かったために集落址の一部の調査しかできず、集落全体の調査が行なわれていなかったため、集落内の祭祀つまり、“ムラのマツリ”的痕跡を見い出すことができなかつたためと思われる。つまり、広範囲な面的な調査を行なえば、必ずと言っていいほど、集落址内からは、祭祀関係遺物が発見されている。これは、少なくとも、古墳時代から平安時代においては、集落内では、マツリと深く、係っていたものと考えられるのではないか。このことは、石製模造品を祭祀に使用していた時期の集落でも同じことが言えるようである。話が少し逸れてしまったが、石製模造品を劍・鏡・玉の3点の仮器として、1つのセットとして定義する考え方の場合では、祭祀遺跡であろうと、祭祀関係遺跡であろうと、3点が一揃えで出土しなければな

らないはずだが、最近、著しく増加した発掘調査例にもかかわらず、1セットで描って検出されることは、極めて少ないと黙っていていい。このことは、石製模造品とヤマト政権との係りに関する基礎的視点の再考も含めて考えなければならないのではないかと思える。

## 2. 時期

石製模造品の時期を決定するには、これまででは、伴出する土器によって、時期の認定が決められていた。これは、石製模造品そのものが、他の遺物では可能であるような、形態的変化が、細かく見い出せないことがある。確かに、石製模造品そのものにも、漠然とではあるが、時間的な差異はある。それは、石製模造品、特に顕著なのが、剣形模造品・有孔円板で見られる。これらの、石製模造品は、使用された初期においては、その作り方も比較的精巧なものが多く、特に剣形模造品は、面取りなどの造り出し方が精巧なようである。そして、石製模造品の使用が少なくなっていく終末期に近づけば近づくに従って、簡略に、より粗雑化しているようである。

石製模造品それ自体では、時期の決定が困難ならば、伴出する土器によって、時期を明確にしなければならない。では、石製模造品が検出される遺跡の種類によって、石製模造品の時期的変化及び、その組成にどのような差異があるのであろうか。この場合の石製模造品の検出される遺跡の種類とは、古墳出土の場合、祭祀遺跡出土の場合、そして、祭祀関係遺跡（主に集落）の場合の、3つに分類できる。

では、まず初めに、古墳から出土する石製模造品の時間的変化を先学の議見を参考にして述べていきたい。まず、著名な論文として、小林行雄氏が、1950年に「古墳時代における文化の伝播」（『史林』第33巻、第3号、第4号）を発表されている。小林氏は同論文の中で、碧玉製から滑石製へと、石製模造品の石材は変化していった点と、副葬品としては当所の碧玉製模造品は1・2点しか供じなかったものが、粗製滑石製模造品を、最後は、多量に副葬していった点を指摘され、そして、石製模造品の滑石製勾玉が、5世紀初頭から中葉にかけて、多量に副葬されることを明確にされている。この論文の中で小林氏も指摘されているように、古墳出土の石製模造品では、勾玉・白玉のはかは、農工具（斧・鎌・のみ・鋤・刀子など）の模造品に限られて出土している。これらのことから、古墳時代中期においては、葬祭分化（死者を祭ることと神を祭ることが完全に分離していた状態。）を小出義治氏は「祭祀」（『日本の考古学』V、古墳時代、下、1966年）で書かれ、相山林継氏も1972年に「祭と葬の分化—石製模造遺物を中心として—」（『国学院大学日本文化研究所紀要』第29輯）に同様の視点で述べられている。葬祭分化・未分化に関しては、井上光貞氏が、福岡県沖ノ島の遺跡を中心に次のように述べられている。「葬祭未分化の状態では、人の靈魂（spirits）であると神（deities）であるとを問わず、同じやり方でそれを礼拝し、崇敬していた。これに反し、葬祭分化の状態になると、靈魂と神との区別が意識され、それぞれの領域で宗教儀礼がおこってくる。すなわち葬儀と祭儀とが成立する。」（井上光貞「古代沖ノ島の祭祀」『東大三十余年』私書版、1978年）。また、小出氏・相山氏に対して、白石太一郎氏は、古墳時代における葬祭分離を次のように述べられている。「前期古墳を含めて、古墳の被葬者は決して神と考えられることはなかったと思われる。それはあくまでも農耕祭祀を中心とする様々な祭祀の司祭者にほかならないのであり、（中略）こうした神まつりの司祭者であった首長に対する葬送祭祀と、神に対するまつりは、古墳時代の初めから本来まったく別個のものであった」（白石太一郎「神まつりと古墳の祭祀—古墳出土の石製模造品を中心として—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集、1985年。）また、白石氏は同論文の中で、古墳出土の滑石製模造品の時期的変遷を4期に分けて、次のように整理されている。第1期は古墳時代の前期末葉で、農工具の石製模造品化が始まった時期であり、刀子・斧・のみなどの農工具中心のきわめて写実的なものがつくられ、一部で石製の剣が出現するほか、勾玉・白玉が滑石で

つくられ、比較的、精巧なものが多いとされている。次の第2期は、古墳時代中期前半であり、この時期は、農工具類の模造品が形式化とともに、粗製の勾玉の模造品などが多く供獻され、また、鎌の模造品が直刃なのも、この時期に該当する。そして、古墳時代中期中葉から中期後半の時期の第3期では、鎌の模造品が曲刃となり、農工具形模造品がより一層、粗製化が進み、勾玉も扁平な板状のものとなる。また、有孔円板や、粗製な剣形模造品も出現する。最後の時期に該当する第4期は、古墳時代中期末から後期初頭であり、より粗雑化していく農工具形模造品も一部に見られるが、この時期は、有孔円板や剣形模造品などが、より顕著になっていくとされている。白石氏のこの古墳での組成及び変遷では異論はないものと思える。

次に、古墳時代の祭祀遺跡における石製模造品の組成の相違と変遷について考えたい。古墳時代の祭祀遺跡においては、神々に供獻した遺物によって、時代的変遷をとらえなければならないが、長野県長野市の大沢新町遺跡、あるいは、茨城県那珂郡東海村の釜付遺跡などのように、調査報告されている祭祀遺跡の大部分が、土師器編年の1型式ないしは2型式ぐらいの比較的、存続期間の短いものが、多数を示しているため、その一つの祭祀遺跡自体で、長期間にわたる変遷及び、その祭祀関係遺物の組成変化を捕らえることが難しいと思える。が、福岡県沖ノ島の沖ノ島祭祀遺跡は他の祭祀遺跡とは、その存続期間という点を取ってみても、その様相を異なる。沖ノ島の祭祀遺跡群は、少なくとも、古墳時代の前期後半ないしは前期末葉から始まり、8世紀後半ないしは9世紀初頭で、その役割を終えているようである。この沖ノ島の祭祀遺跡群の変遷と祭祀関係遺物の組成の変化は、その他の祭祀遺跡においても基本的には変わらないようである。このことは、1966年に亀井正道氏がその名著『建鉢山—福島県表揚村古代祭祀遺跡の研究』の中で述べられている。亀井氏は、その中で、祭祀関係遺物の組成を中心に、4世紀末から7世紀中葉までの時期の祭祀遺跡の変遷を6期に分けておられる。その中の第1期は、4世紀末から5世紀前半の時期で、実物の鏡・武器・玉類などを伴い、石製模造品はまだ登場していない時期で、該当する祭祀遺跡としては、奈良県天理市の石上神官禁足地や、沖ノ島17号遺跡などがある。第2期は、5世紀中葉前後で、実物の宝器類とともに、剣、刀子、斧、鎌、鏡、有孔円板、勾玉などの石製模造品が多量に使用されている。遺跡では、沖ノ島16・19号遺跡、奈良県の布留遺跡、福島県建鉢山の高木地区などがある。第3期は、5世紀後半から6世紀初頭に当たる。この時期は、以前の第2期と同じく、石製模造品を多量に出土するが、その品目が、剣形模造品、有孔円板、勾玉、白玉へと固定化していく時期である。遺跡としては、福島県建鉢山三森遺跡、東京都狛間遺跡などがある。第4期は6世紀前半から6世紀中葉にかけてで、石製模造品も依然として存在するが、数量が著しく減少し、かわって土製模造品が出現する。遺跡としては、静岡県の洗田遺跡、和歌山県の坂田山遺跡などがある。第5期は、6世紀後半から7世紀初頭で、石製模造品がほとんどなくなり、土製模造品が一般的となり、静岡県の板上遺跡などがある。そして、最後の第6期は7世紀前半から7世紀中葉にかけてで、土製模造品も少くなり、手捏土器が主体となる。遺跡には千葉県東長田遺跡などがある。

この亀井正道氏の論考は、すでに30年以上前のものであるが、祭祀関係遺物の組成及びその時期的変遷を明確に位置づけ、祭祀遺跡の時期を6期に分けられたことは、現在においても、その大部分の祭祀遺跡においては、ほぼ変更する必要性はないと思われる。ただ、千葉県安房郡白浜町の小滝涼源寺遺跡は少なくとも、例外的な祭祀遺跡のようである。また、亀井氏の編年の実年代の比定に関しては、若干ながら異論はあるようである。氏の設定された第2期の布留遺跡の年代について、5世紀中葉前後とされているが、柏山林継氏はこの時期を5世紀初頭から5世紀中葉以降までと考えておられる（柏山林継「石製模造品」「神道考古学講座」第3巻、原始神道期2、1981年）。そして、寺沢知子氏は、祭祀遺跡の上限を亀井編年の第1期（4世紀末から5世紀前半）より古く設定していく、4世紀後半の時期とさ

れていて、布留3期あるいは五領3期の時期を、祭祀遺跡での石製模造品の出現期とされている（寺沢知子「石製模造品の出現」『古代』第90号、1990年）。

最後に、祭祀関係遺跡すなわち、集落遺跡における古墳時代の石製模造品の組成の変遷についてはどうであろうか。この間に対しても、高橋一夫氏が1971年に「石製模造品出土の住居址とその性格」（『考古学研究』第18巻3号）の論考中において、また、1975年にも、相山林雄氏が「住居址発見祭祀遺物の研究－時期検討を中心に－」（『国学院大学日本文化研究所紀要』第35輯）の中で述べられている。高橋・相山両氏はこれらの論考の中で、石製模造品の組成変化及び時期的変遷に関しては、ほぼ同様の結論に到っている。すなわち、関東地方の一般の集落の遺跡において、石製模造品がみられるようになるのは、堅穴住居では、土師器の南関東の編年では、和泉式の時期からであり、この和泉式期の中でも、前半期の和泉I式の時期は少なく、一般化していくのは、後半期すなわち、和泉II式であるとされている。そして、その後の古墳時代後期の鬼高I式の時期までは、その出土数も増加しているが、鬼高II期になると極端に減少していく。石製模造品の組成は、全時期を通じて、剣形模造品、有孔円板、勾玉、白玉がほとんどで、農工具形模造品はほとんど見られないとされている。高橋・相山両氏も指摘されているように、集落遺跡から検出される石製模造品は、その盛期を和泉式期にあることは間違いないようである。ただ、実年代でというと、和泉式の土師器がいつから使われ、いつまで使われなくなったかという見解がまだ一定ではないことからも明確にするのは難しい。ただ、この問題は後文中に示す川崎山遺跡の石製模造品の時期との問題とも重なる点があるので、筆者としての見解をここで、少し触れておきたい。筆者としては、土器の編年に関しては、まず、関東における五領期と西日本における布留期との併行関係に関しては、大村直氏が指摘されているように（大村直「千葉の様相」第5回三県シンポジウム「古墳出現期の地域性」1984年）、五領式期を大きく、3期に分けた場合、五領1期、五領2期、五領3期をそれぞれ、布留1期、布留2期、布留3期に当たるるものと考える。また、遺跡から検出される堅穴住居跡の重複関係、遺跡の動態、土器の変遷などから考えて、和泉式土器は、五領式土器に比べて、存続期間が短かったものと思われる。そして、和泉期の開始時期と成立時期を、坂本和俊氏が述べられているように（坂本和俊「関東の前期古墳出土の土器」「古墳時代前半期の古墳出土土器の検討」第25回埋蔵文化財研究集会第1分冊、1989年）、初期須恵器のTK73型並行かあるいはその直前に設定し、和泉式土器を和泉1式、和泉2式の二時期に分けた場合の、和泉1式、和泉2式の境界を、須恵器のTK216型式の前後とする点を妥当であると考える。また、寺沢知子氏が述べられている（「石製模造品の出現」1990年）ように、鬼高期の開始については、それを模倣坏の出現によると規定し、ほぼTK47型式の時期に該当すると考える。そして、石製模造品の出現期としての変遷を三期に分けた寺沢知子氏の編年のうち、第Ⅰ期と第Ⅲ期の年代観を支持したい。ただ、石製模造品の出現期を寺沢氏は氏の編年の第Ⅰ期つまり、五領3式（布留3式）の時期とされ、実年代としては、4世紀後半とされている点つまり、石製模造品の出現期に関しては、検討の必要性があるのではないかと思える。なお、寺沢氏の第Ⅱ期は須恵器出現前後の須恵器編年のTK73型式から、TK216型式までのつまり、土師器の和泉1式の時期と設定し、実年代では、4世紀末から5世紀の第1四半期とされている。また、第Ⅲ期は、TK216型式からTK23型式の出現までの時期、すなわち、和泉2式の時期とし、実年代としては5世紀の第2四半期から、同じく5世紀の第3四半期までの5世紀中葉までの時期としたい。そして、5世紀の後半（第4四半期）から、鬼高式の模倣坏が出現し、鬼高期が始まっていくものと考えられる。

### 3. 廉棄の様相—八千代市川崎山遺跡 SI24 住居跡の場合—

集落内遺跡の堅穴住居跡の時期を決定するには、床面直上より検出されている土器によって時期が決

定することは言うまでもない。では、廃棄された竪穴住居跡の埋没土中より検出される土器は、いったいどのような意味を呈しているのだろうか。本稿の主題である千葉県八千代市の川崎山遺跡 SI24 住居跡は石製模造品の剣形模造品が1点出土していることから、祭祀関係遺跡であることは間違はないが、この剣形模造品を含めて、本住居跡より検出されている遺物はすべて、竪穴住居跡の床面上より出土しているものではなく、住居跡が廃絶された後の第1次埋没土上面より検出されている。このような、土器の廃棄について、小林達雄氏は、土器廃棄の概念をケースに応じて、三種類に定義づけされている（小林達雄「縄文世界における土器の廃棄について」『国史学』第93号、1974年）。それぞれの土器は、それぞれの器種に応じて、機能用途を異にし、製作され、用途に応じ使用される。そして、それぞれの使用の目的を終え、その使用が中止になる事態に到る。そして、土器がその使用の目的を達成した場所から他の場所に運搬されて廃棄された場合。土器の使用目的を終えた場所にそのまま放置する場合。また、一次的に放置されたり、捨てられた土器や集落内などに散乱していた土器が再び他の場所に捨てる場合などが想定され、この三つの場合を小林達雄氏は、廃棄と定義している。川崎山遺跡 SI24 住居跡の場合、この竪穴住居がその使命を終え、廃絶され、竪穴住居跡が埋没しあげる。そして、この埋没土（第1次埋没土）上面に、他の場所から運んできた石製模造品を含めた遺物をこの SI24 に一括廃棄している。その後、さらに竪穴住居跡の埋没が進行し、竪穴住居跡の凹みがほとんど消えて、平坦になり、さらに堆積が進行し、最後は現表土が形成されている。この住居跡の遺物の一括廃棄は、同一の時間軸上のほぼ短期間の間にに行なわれている。遺物の出土状況から観察しても、大きく分ければ、1つの廃棄ブロック、小さく分けても3つの廃棄ブロックで形成されている。これらのことからも SI24 の一括廃棄遺物は、一度、多くとも3回のきわめて短い時間軸の中で、他の場所から運びこまれて廃棄されているようである。では、床上遺物がないのに、堆積土中の遺物で、この竪穴住居跡の使用されていた時期を決定してよいものであろうか。この問題は、末木健氏（末木健「竪穴住居の埋没と出土遺物から」『すまいの考古学－住居の廃絶をめぐって』山梨県考古学協会1996年度研究集会資料集、1996年）らを含め多くの研究者が述べているように、堆積土中の土器は、その住居の存続期間に必ず、時間的にオーバーラップする時期のものとはいえない。しかし、住居の使用されていた時期を決定するのに、覆土中の土器を使わなければならなかつたのは、他に適当なスケールがなかったことにほかならない。ただ、SI24 住居跡の場合も、覆土中の遺物から、竪穴住居の使われていた時期を決定するのは危険であるが、廃絶され覆土が堆積し始めた竪穴住居跡の窪地に、どこからか持ってきた石製模造品を廃棄した時期は、いっしょに捨てられていた土器によって、決定したとしても誤りはないものと思われる。

#### 4. 廃棄の同時性と石製模造品

八千代市川崎山遺跡 SI24 住居跡において、問題となるのは、石製模造品（剣形模造品）と共に廃棄されている土器に從来の土器編年においては、製作時の時間差があるのではないかという点である。これは鈴木公雄氏がかつて述べられている（鈴木公雄「土器型式における時間の問題」『上代文化』第38輯、1969年）ように「製作の同時性」と「廃棄の同時性」という問題にもふれるものであると思われる。鈴木氏が指摘されているように、「製作の同時性」と「廃棄の同時性」と「廃棄の同時性」が異なる場合つまり、明らかに製作年代が異なる土器は、一括出土の状態で、SI24 住居跡のように、「廃棄の同時性」につらぬかれている場合には、そのようなことが何故に発生してしまったのかを考え、このような形で遺物が存在すること自体の中に、その土器を製作し、使用し、そして、捨てた当時の社会の状況が反映されていると考えねばならないのであろう。では、「製作の同時性」の異なる場合すなわち、製作時の時間差のある土器が、同一時に廃棄されている場合は、どのような、当時の状況が考えられるのであろうか。第1のケー

スとして、過去に使用し既に使われなくなつて何十年（1型式を20年とすれば、20年以内）も時を経てはいる土器を、現在（土器廃棄時点）まで、どこかに持ち続けて、何らかの理由で、土器廃棄時点の時代に使われている土器と共に、一括廃棄している場合（ケース1）。第2のケースとして、土器廃棄時点の時代に、前時代の型式の土器も、いっしょに使用していて、一括廃棄している場合（ケース2）。この二つのケースの場合、ケース1はあまりに不自然で、土器の型式が大きく変化する時点においても、よりケース2の場合が、よりリアリティがあるのではないだろうか。寺沢知子氏は、五領期における石製模造品を強く示唆されている（寺沢知子1990）が、あえて和泉1式の土器と五領3式の土器を分ける必要性はないのではないか。前時代の五領式の所産を残す時代に、和泉式の土器と共に、石製模造品が使用されているのが、石製模造品の出現の様相と思える。このような遺跡として、八千代市川崎山遺跡 SI24 住居跡と同様な可能性のある祭祀関係遺跡（集落遺跡）としては、千葉県市原市の番後台遺跡44号住居址、千葉県香取郡阿玉台北遺跡B地点007号住居址、茨城県水戸市の大塚新池遺跡3号住居址なども、その可能性があると思われる。また、祭祀遺跡としては、長野県と群馬県の県境の入山峠、岐阜県と長野県の県境の神坂峠、福島県西白河郡の建鉢山高木地区、千葉県安房郡小滝涼源寺遺跡などもその可能性を検討すべきではないかと思われる。なお、川崎山遺跡 SI24 住居跡に来てはいた一括廃棄の遺物の時期は、寺沢知子氏の編年の第Ⅱ期（4世紀末から5世紀の第1四半期）に該当するものと思われる。

(大潤 淳志)

## 参考・引用文献

- 伊藤 信雄 「東北地方に於ける石製模造品の分布とその意義」『歴史』第6輯 1953年  
 植山 林継 「古代祭祀遺跡の分布私考」『上代文化』第35輯 1965年  
     「祭と葬の分化—石製模造品を中心として—」  
     『国学院大学日本文化研究所紀要』第29輯 1972年  
     「住居址発見祭祀遺物の研究—時期検討を中心に—」  
     『国学院大学日本文化研究所紀要』第35輯 1975年  
     「石製模造品」『神道考古学講座』第3巻、原始神道期 2 1981年  
 亀井 正道 「建鉢山—福島県表郷村古代祭祀遺跡の研究ー」1966年  
     「祭祀遺跡ー山と海ー」『日本の考古学』第7巻 1967年  
 佐々木幹雄 「子持勾玉私考」『古代探叢II』 1985年  
 小林 行雄 「古墳時代における文化の伝播」『史林』第33巻、第3・4号 1950年  
 小出 義治 「祭祀」『日本の考古学』V、古墳時代、下 1966年  
 井上 光貞 「古代沖ノ島の祭祀」『東大三十余年』私書版 1978年  
 白石太一郎 「神まつりと古墳の祭祀—古墳出土の石製模造品を中心としてー」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集 1985年。  
 笹沢 浩 「駒沢新町遺跡」『長野県史、考古資料編』 1982年  
 東海村釜付遺跡調査会 「常陸釜付祭祀遺跡」 1986年  
 宗像神社復興期成会 「沖ノ島」 1958年  
     「続沖ノ島」 1961年  
 宗像大社復興期成会 「宗像沖ノ島」 1978年  
 朝夷地区教育委員会・白浜町 「小滝涼源寺一千葉県安房郡白浜町祭祀遺跡の調査」 1989年

- 大沢 淳志 「祭祀遺跡小滝涼源寺—房総半島最南端古墳時代の祭祀遺跡の研究ー」 1994年  
寺沢 知子 「石製模造品の出現」『古代』第90号 1990年  
高橋 一夫 「石製模造品出土の住居址とその性格」『考古学研究』第18巻3号 1971年  
大村 直 「千葉の様相」『古墳出現期の地域性』第5回三県シンポジウム 1984年  
坂本 和敏 「関東の前期古墳出土の土器」『古墳時代前半期の古墳出土土器の検討』  
第25回埋蔵文化財研究集会第1分冊、1989年  
埋蔵文化財研究会 「古墳時代前半期の古墳出土土器の検討」 1989年  
小林 達雄 「縄文世界における土器の廃棄について」『国史学』第93号、1974年  
末木 健 「堅穴住居の埋没と出土遺物から」『すまいの考古学—住居の廃絶をめぐって』  
山梨県考古学協会1996年度研究集会資料集 1996年  
山梨県考古学協会 「すまいの考古学—住居の廃絶をめぐって」  
山梨県考古学協会1996年度研究集会資料集 1996年  
鈴木公雄 「土器型式における時間の問題」『上代文化』第38輯 1969年  
財団法人千葉県文化財センター 「市原市番後台遺跡・神明台遺跡」 1982年  
矢戸三男他 「阿玉台北遺跡」 1975年  
財団法人茨城県教育財団 「常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ」 1981年  
軽井沢町教育委員会 「入山峠」 1983年  
阿智村教育委員会 「神坂峠」 1969年  
東日本埋蔵文化財研究会 「古墳時代の祭祀—祭祀関係の遺跡と遺物ー」  
第2回東日本埋蔵文化財研究会 1993年

**八千代市川崎山遺跡調査会（平成6年4月発足当時）**

**会長** 八角 敏正（八千代市教育委員会生涯学習部長）  
**1号委員** 今井 利久（八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課長）  
**2号委員** 藤沼 伸滋（川崎製鉄株式会社エンジニアリング事業部）  
**監査委員** 藤沼 伸滋（2号委員兼任 平成6年4月1日制定「八千代市川崎山遺跡調査会設置規定」第5条により会長が指名）

**事務局**

**局長** 今井 利久（八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課長）  
**係長** 酒井 久男（八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課文化係長）  
**局員** 秋山 利光（八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課主事）

**調査班**

**調査員** 小川 和博（日本考古学研究所副所長兼茨城事務所長）

**調査員** 市村 義和（日本考古学研究所調査研究員）

**調査補助員** 藤井清治郎 吉田倉雄 加藤弘次 竹尾忠雄 烏羽良子 小崎啓介  
堀江繁夫 大元岩雄 本田アツ子 渡辺安明 井上健次 上田真理子  
渡辺信子 寺澤洋子 内山多喜子 堀井弥生 竹内美亜 津田美知子  
伊藤イチ子 清宮克宣 畑田正和 伊藤勇治 真坂信雄 寺島裕子  
澤柳安子 小形幸子 岡本美土里 川上悦子 小畠由美子 渡辺優子  
遠山昌子 山口初江 松戸洋二 小島保江 早坂英子 岩井アヤ  
中尾恭子 木村しづ子 松岸健吉 原田雪子  
磯江公子 岩瀬道子 遠藤啓子 笠川千代子 小林美津子 斎藤節子  
田村美恵子 東原和男 早坂幸子 宮脇和子（以上50名）  
**調査整理員** 久保光子 志田フミ子 鈴木恵美子 鈴木桂子 立原キミ子  
(以上5名)

**事務員** 鈴木安子 山田昌代 高崎房江

（平成7年5月15日から）

**会長** 村越 利光（八千代市教育委員会生涯学習部長）  
**1号委員** 今井 利久（八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課長）  
**2号委員** 藤沼 伸滋（川崎製鉄株式会社エンジニアリング事業部）  
**監査委員** 藤沼 伸滋（2号委員兼任）

**事務局**

**局長** 今井 利久（八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課長）  
**係長** 小名木信雄（八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課文化係長）  
**局員** 秋山 利光（八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課主事）

**調査班**

**調査員** 小川 和博（日本考古学研究所副所長兼茨城事務所長）

**調査整理員** 德生さち子 遠藤啓子

**事務員** 鈴木安子 山田昌代 高崎房江

（平成8年4月1日から）

**会長** 村越 利光（八千代市教育委員会生涯学習部長）  
**1号委員** 今井 利久（八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課長）  
**2号委員** 藤沼 伸滋（川崎製鉄株式会社エンジニアリング事業部）  
**監査委員** 藤沼 伸滋（2号委員兼任）

**事務局**

**局長** 今井 利久（八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課長）  
**係長** 小名木伸雄（八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課文化係長）  
**局員** 秋山 利光（八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課主事）

**調査班**

**調査員** 小川 和博（日本考古学研究所副所長兼茨城事務所長）

**調査整理員** 德生さち子 遠藤啓子

**事務員** 鈴木安子 山田昌代 高崎房江

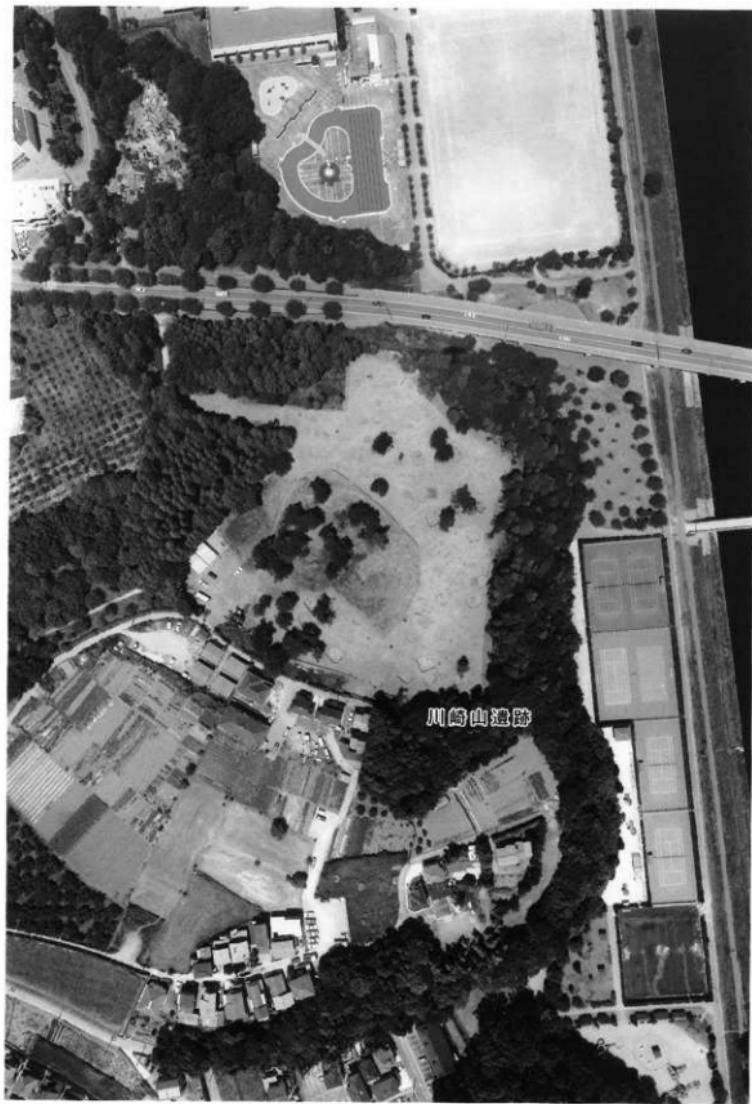
## 報告書抄録

ふりがな	ちばけんやちよし かわさきやまいせき
書名	千葉県八千代市 川崎山遺跡
副書名	埋蔵文化財発掘調査報告書
卷次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	小川 和博・大澤淳志
編集機関	八千代市遺跡調査会
所在地	〒276-0045 八千代市大和田138-2 教育委員会生涯学習部社会教育課内 TEL.0474-83-1151
発行機関	川崎製鐵株式会社
発行年	1999年3月31日

所 収 遺 跡 名	所 在 地	コ ー ド		北 緯	東 經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かわさきやまいさき 川崎山遺跡	やちよしかやだまち 八千代市菅田町 751-1外	12221	241	35度 43分 10秒	140度 06分 52秒	1994.4.12 / 1994.10.28	10,000m <sup>2</sup>	共同住宅建設

所 収 遺 跡 名	種 别	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
川崎山遺跡	集落	旧石器時代 縄文時代 弥生時代 古墳時代 奈良・平安時代 中・近世	旧石器ユニット 1カ所 陥し穴 6基 土坑 7基 住居跡 22軒 住居跡 27軒 住居跡 2軒 溝状遺構 2条 土坑 20基	旧石器(ナイフ形石器、石核、細石核) 縄文土器(早期・前期・中期・後期) 弥生土器(後期)、紡錘車 土師器、土製品(勾玉、玉類) 石製品(石製櫛造品、砥石、磨石、鞋石) 土師器、須恵器	Ⅴ層から石器群が出土 陥し穴が台地縁辺部に形成される。 南関東系と北関東系の住居跡が混在 前期・中期・後期の住居跡が検出 かまどを伴う小型の住居跡 2軒検出

P  
L  
1



川崎山遺跡遠景 (1:2000)

1. 遺跡遠景



2. 遺跡近景



3. 遺跡近景



1. 表土層除去状況



2. 表土層除去後調査



3. 調査区全掘



1. PG7 北壁土層斷面

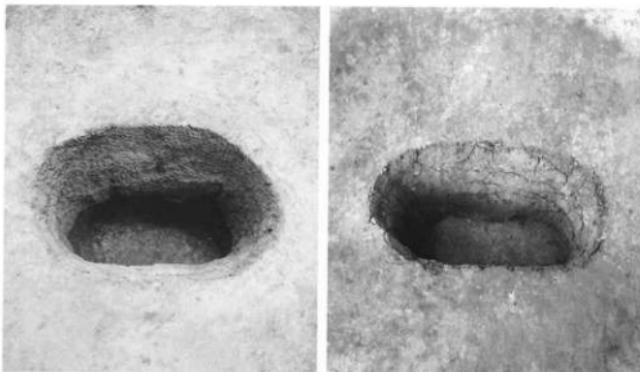


2. 石器集中地點

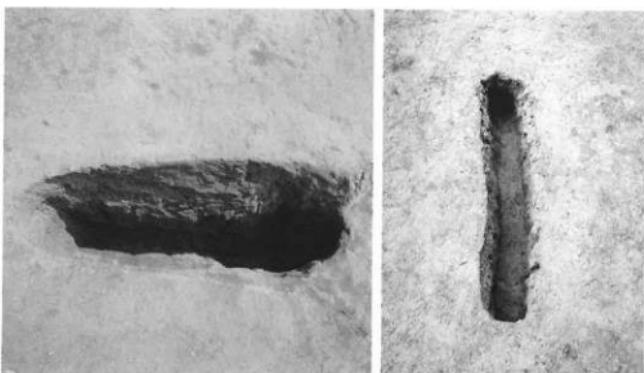


3. 石器集中地點

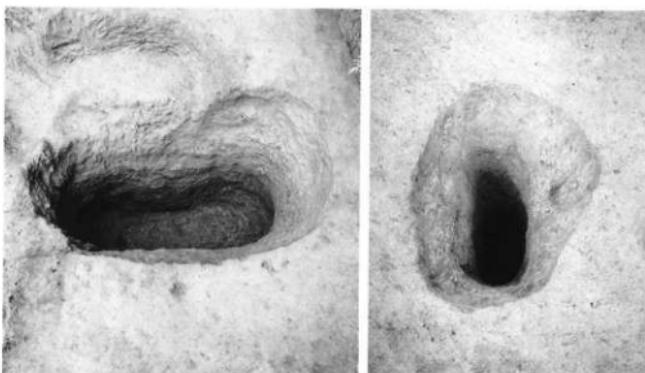




1. 土坑  
SK04(左)  
2. 土坑  
SK08(右)

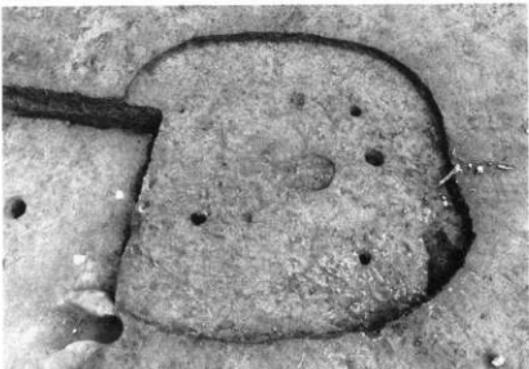


3. 土坑  
SK11(左)  
4. 土坑  
SK24(右)

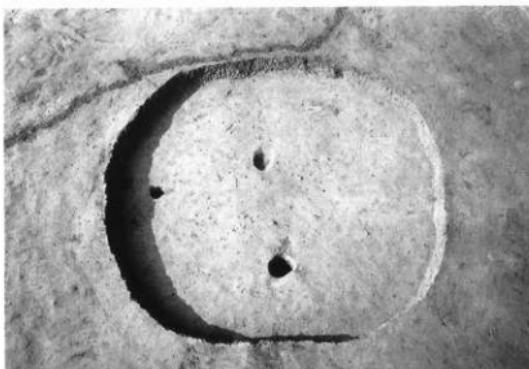


5. 土坑  
SK12(左)  
6. 土坑  
SK25(右)

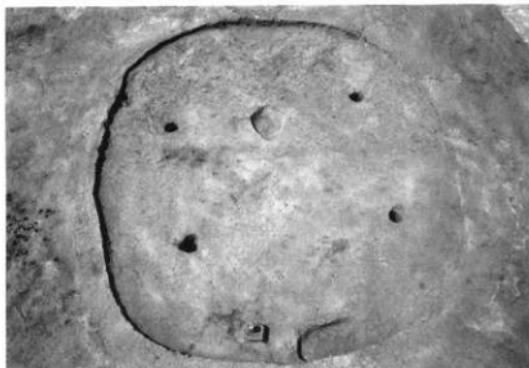
1. 住居跡 SI15



2. 住居跡 SI23

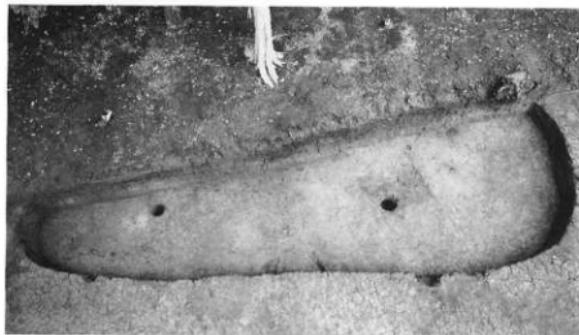


3. 住居跡 SI27

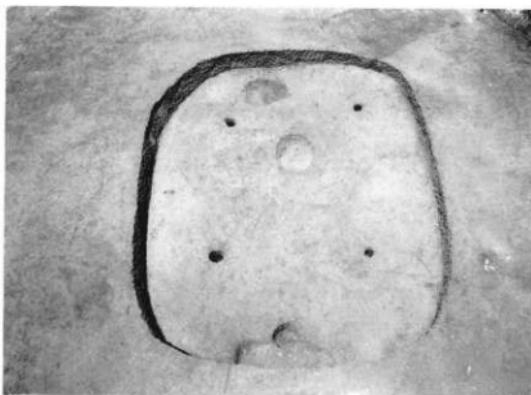




1. 住居跡 SI30

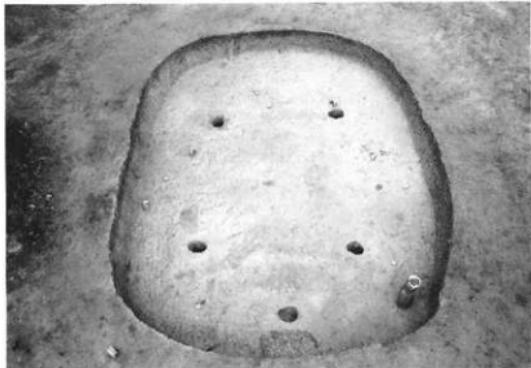


2. 住居跡 SI36

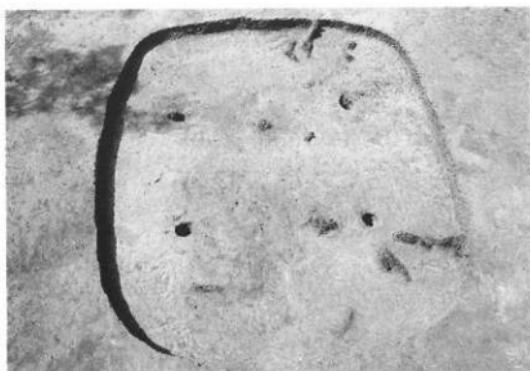


3. 住居跡 SI35

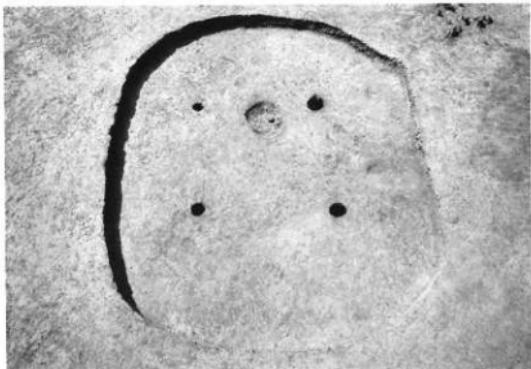
1. 住居跡 SI37



2. 住居跡 SI38



3. 住居跡 SI39



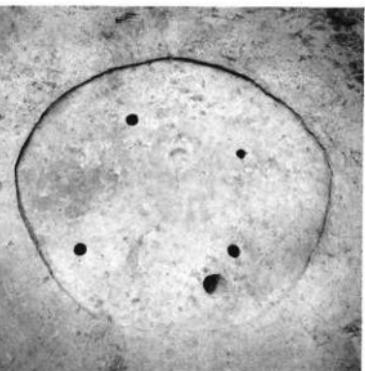
1. 住居跡 SI42



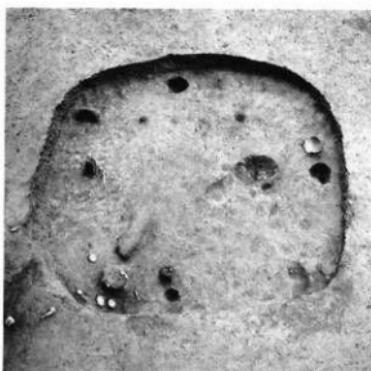
2. 住居跡 SI43 ▶



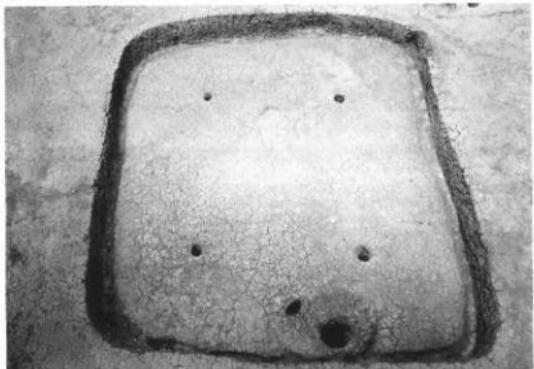
3. 住居跡 SI47 ▲



4. 住居跡 SI45 ▼



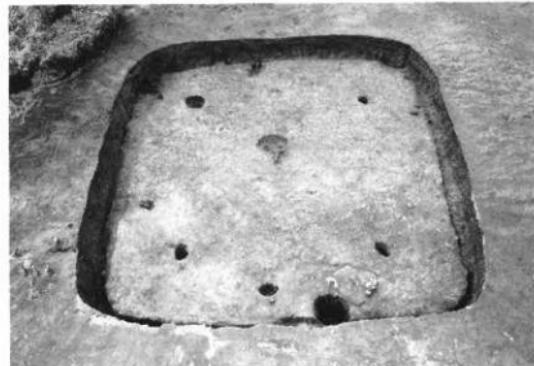
1. 住居跡 SI04



2. 住居跡 SI05

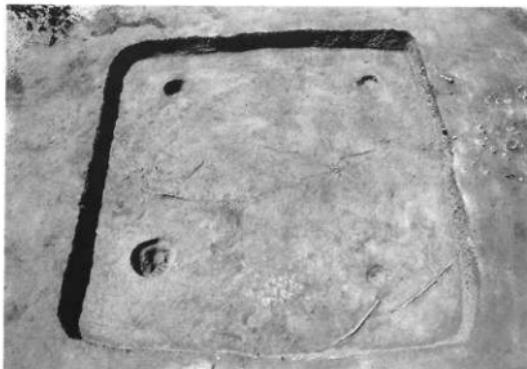


3. 住居跡 SI06

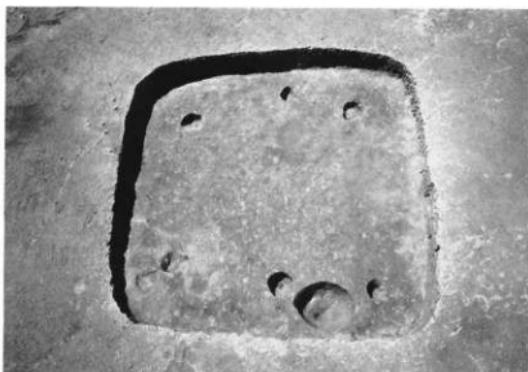


P  
L  
11

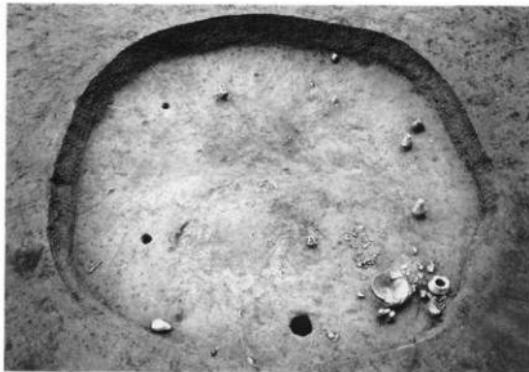
1. 住居跡 SI08



2. 住居跡 SI11

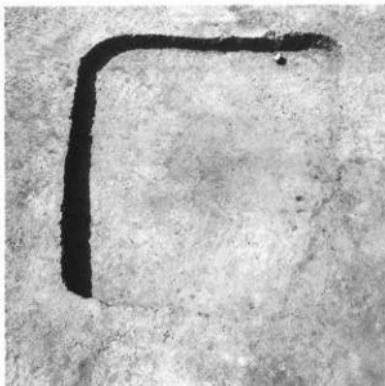


3. 住居跡 SI22





1. 住居跡 SI32



2. 住居跡 SI40

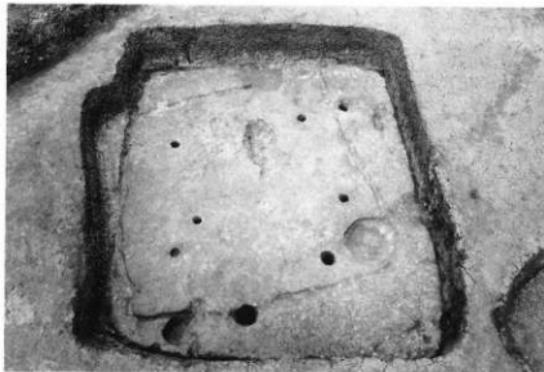
1. 住居跡 SI51

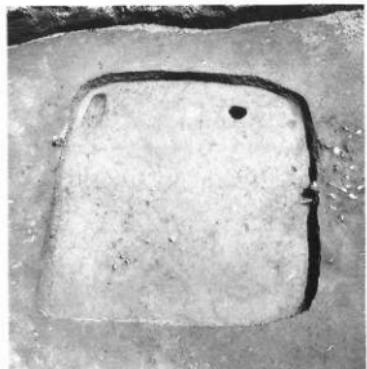


2. 住居跡 SI01-A

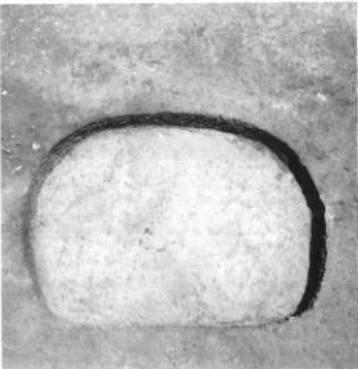


3. 住居跡 SI01-B

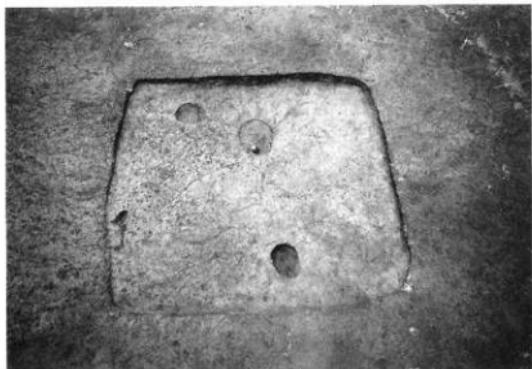




1. 住居跡 SI02 ▲



2. 住居跡 SI03 ▼

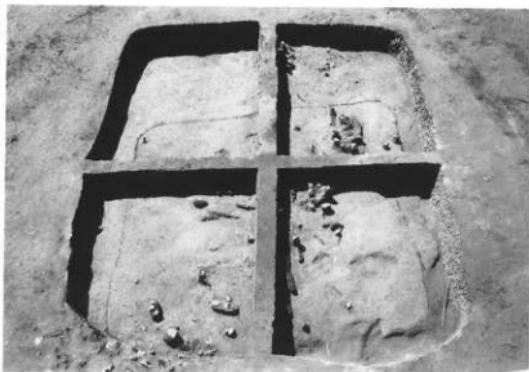


3. 住居跡 SI07



4. 住居跡 SI09

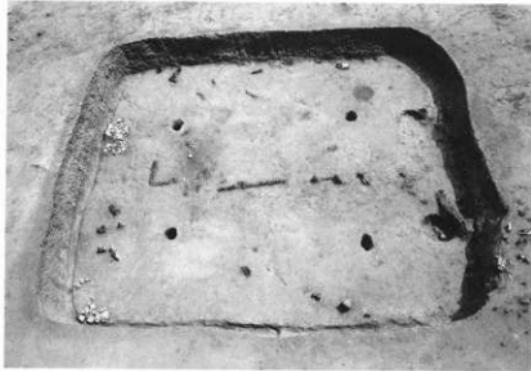
1. 住居跡 SI10 調査中



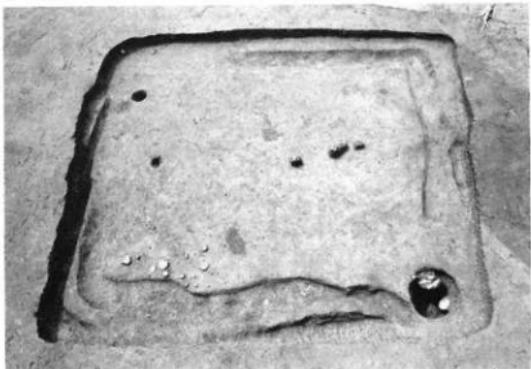
2. 住居跡 SI10-A



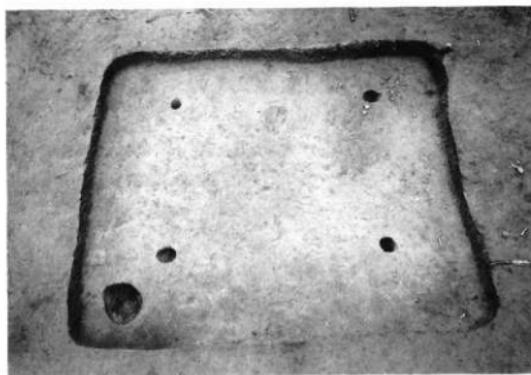
3. 住居跡 SI10-B



1. 住居跡 SI12

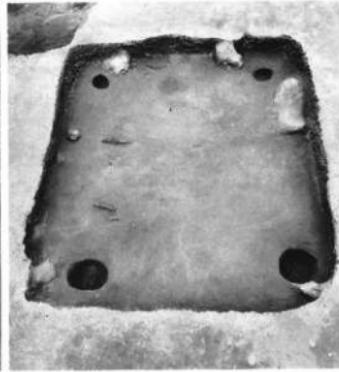
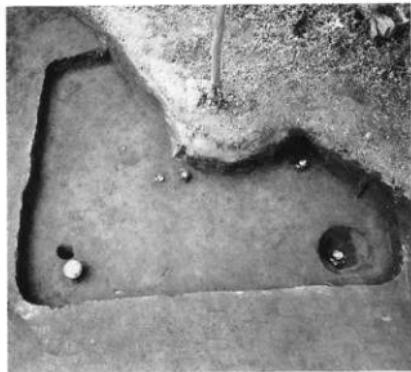


2. 住居跡 SI13 ▶



3. 住居跡 SI18 ▲

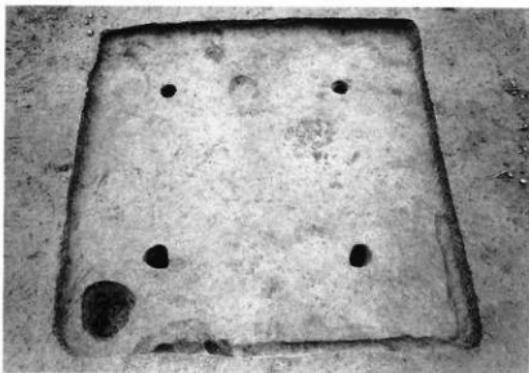
4. 住居跡 SI16 ▼



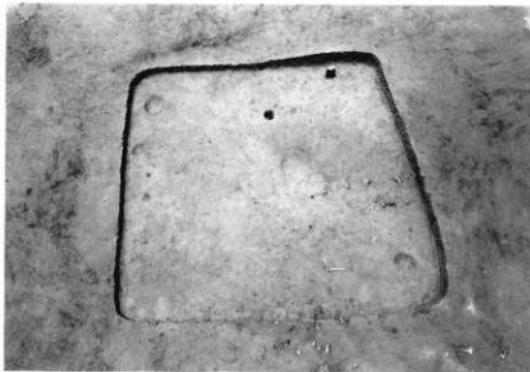
1. 住居跡 SI19



2. 住居跡 SI20



3. 住居跡 SI21



1. 住居跡 SI24

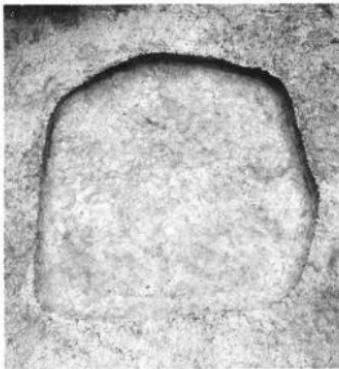


2. 住居跡 SI26 ▶



3. 住居跡 SI28 ▼

4. 住居跡 SI31 ▲





1. 住居跡 SI33



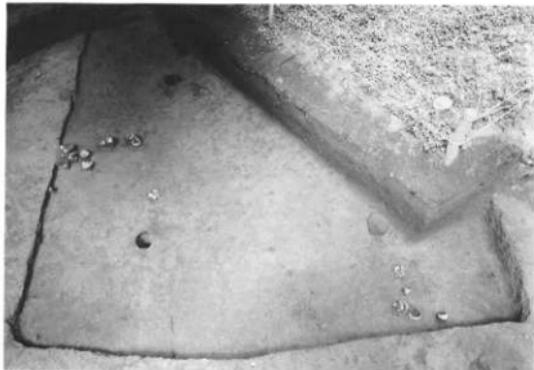
1. 住居跡 SI34





1. 住居跡 SI41 ▲

2. 住居跡 SI44 ▼



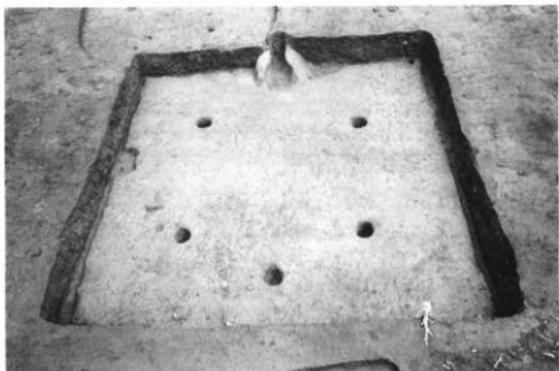
3. 住居跡 SI46 ▶

4. 住居跡 SI49 ▼

5. 住居跡 SI50 ▲



1. 住居跡 SI14



2. 住居跡 SI29



3. 住居跡 SI17 ▼



4. 住居跡 SI25 ▲



1. 土坑 SK01,02,03

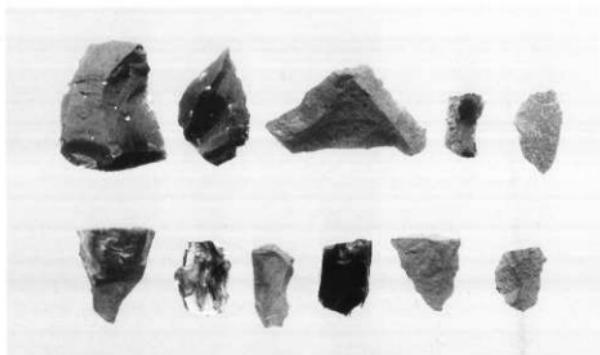


2. 溝 SD01

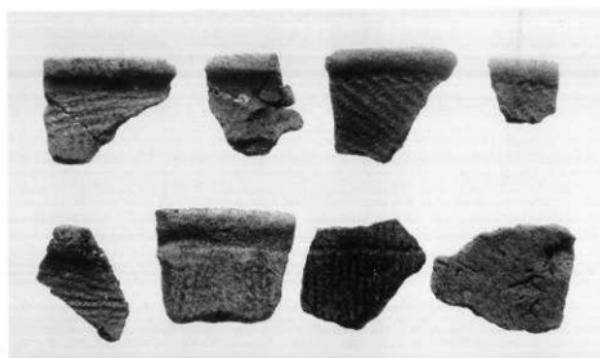


3. 調査区南端部

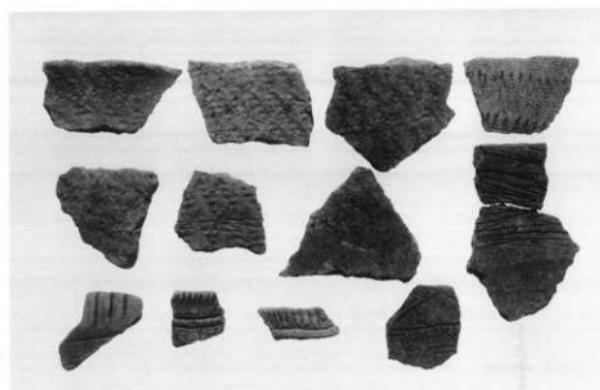




1. 旧石器時代遺物



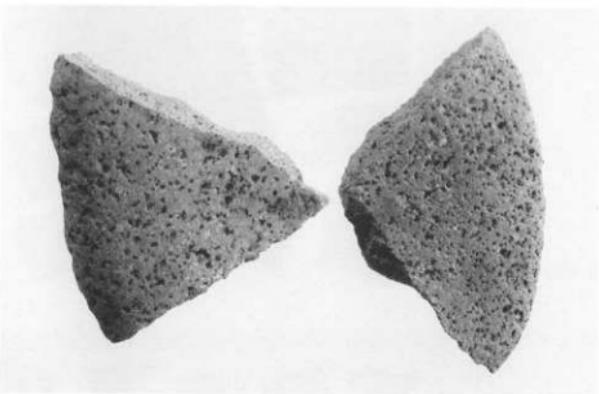
2. 繩紋時代早期の  
土器



3. 繩紋時代前期の  
土器



1. 繩紋時代中期の  
土器

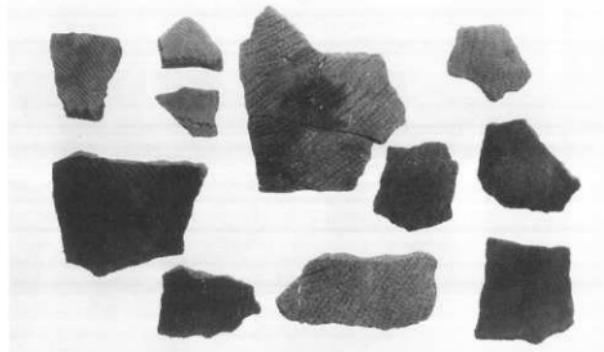


2. 繩紋時代の石器  
(石皿)



3. 繩紋時代の石器  
(石鏃)

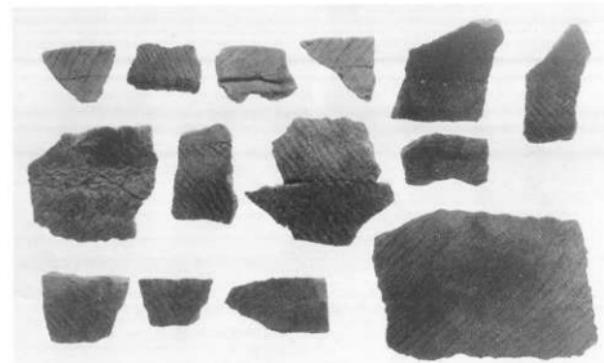
1. SI15 出土遺物

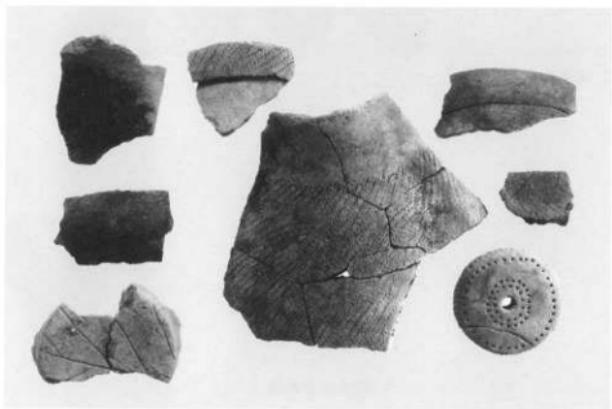
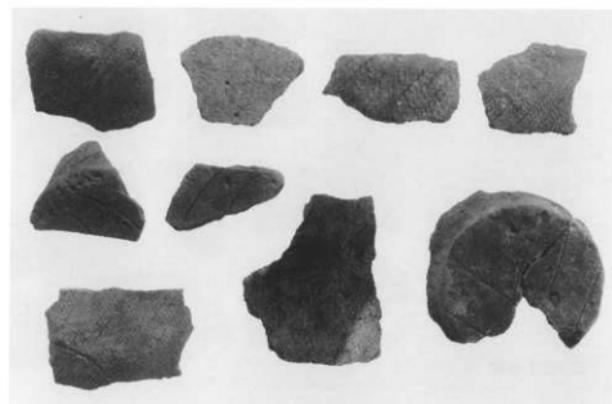


2. SI23 出土遺物

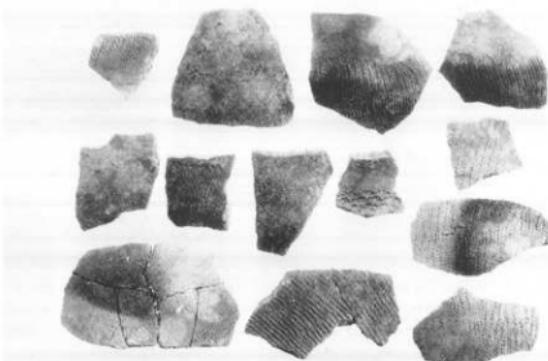


3. SI27 出土遺物





1. SI38 出土遺物



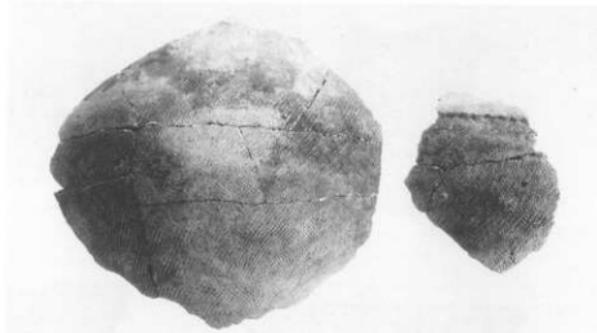
2. SI38 出土遺物



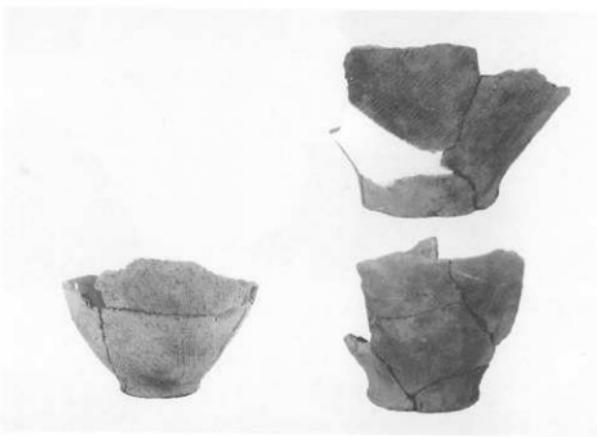
3. SI39 出土遺物



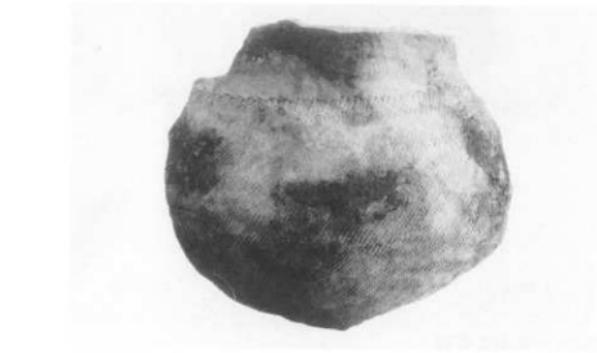
1. SI42 出土遺物



2. SI43 出土遺物



3. SI47 出土遺物



P  
L  
30

1. SI04



2. SI06



3. SI06



4. SI06



5. SI06



6. SI06



7. SI06



8. SI06



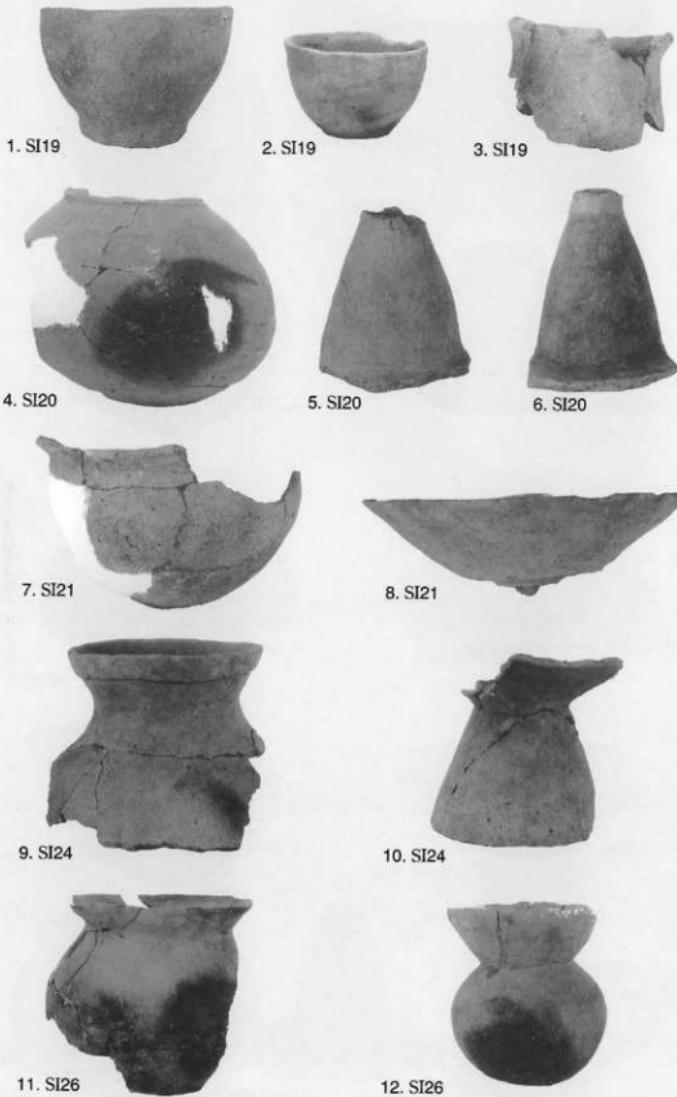
9. SI06



10. SI06



SI04 · 06 出土遺物





1. SI22



2. SI22



3. SI22



4. SI22



5. SI40



6. SI40



7. SI48



8. SI48



9. SI48



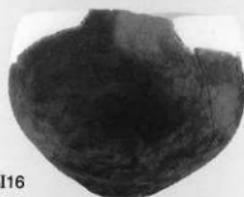
10. SI48



1. SI12



2. SI12



3. SI16



4. SI16



5. SI18



6. SI18



7. SI18



8. SI18



9. SI18



10. SI18



11. SI18

SI12・16・18出土遺物



1. SI51



2. SI51



3. SI51



4. SI51



5. SI01



6. SI01



7. SI01



8. SI01



9. SI01



10. SI01

1. SI09



2. SI09



3. SI09



4. SI09



5. SI10A



6. SI10A



7. SI10A



8. SI10A



9. SI10B



10. SI10B



SI09 • 10A • 10B 出土遺物



1. SI26



2. SI26



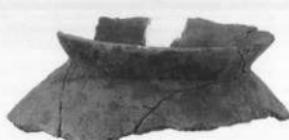
3. SI26



4. SI26



5. SI33



6. SI33



7. SI33



8. SI33

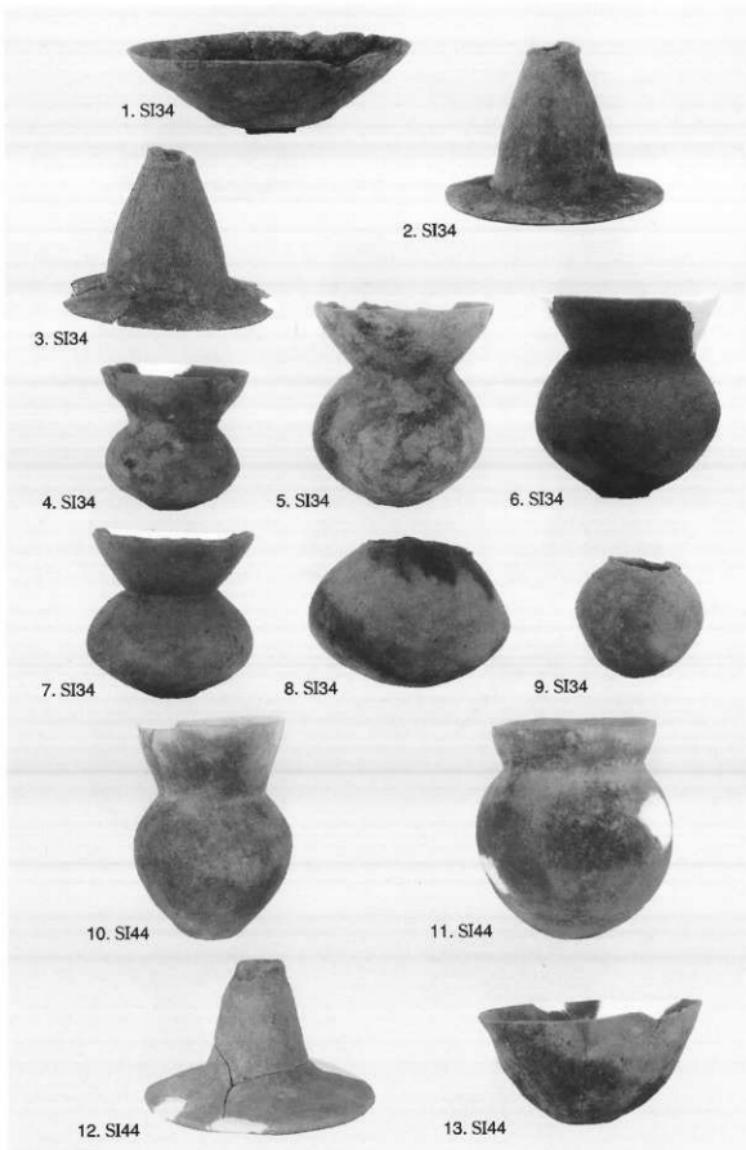


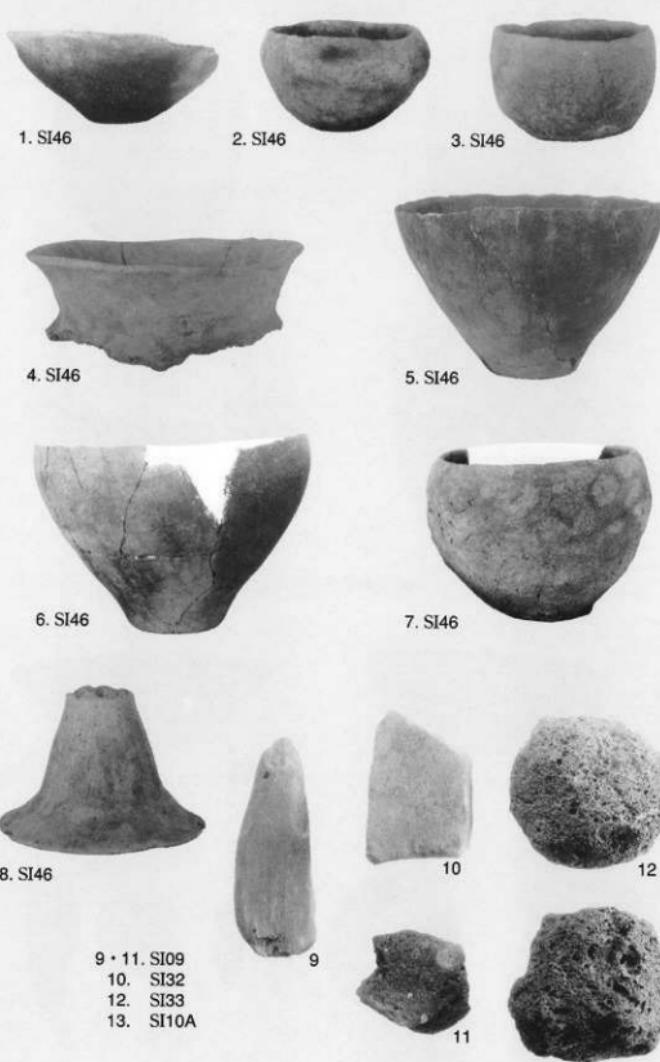
9. SI33



10. SI33







SI46・09・32・33・10A 出土遺物

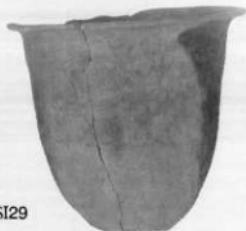
1. SI29



2. SI29



4. SI29



5. SI29



6. SI17



7. SI25



7 · 9. SI10B

8. SI06

10. SI14

11. SI01

12. SI24



千葉県八千代市  
川崎山遺跡  
—埋蔵文化財発掘調査報告書—

---

印 刷 平成11年3月31日発行  
発 行 川崎製鉄株式会社  
編 集 八千代市川崎山遺跡調査会  
千葉県八千代市大和田138-2  
電 話 047-483-1151 社会教育課内  
印 刷 株式会社 山下印刷

---